島田忠臣の詩の諧謔的表現について

On the Humorous Expressions of Shimada Tadaomi's Poems

廖栄発

Shimada Tadaomi was one of the greatest poets of the Heian period. Although he has been generally regarded as a gentle and stable scholarly poet, his poems are actually full of expressions that are humorous or provoke laughter. In this article, I place emphasis on the humorous expressions in Tadaomi's eight poems, probe into the method and significance of his composition, and at the same time reveal an unknown humorous side of him.

In the first section, I choose two poems, "Medicine" and "Cherish the Cherry Blossoms", as examples to outline the two basic methods used in the humorous expressions of Tadaomi's poems. The first one is an example of how he learned from Chinese poetry and expresses the Chinese style of humor in the same way as Chinese poets, while the second one is an example of how he adopted Japanese poetry (Waka)'s ideas and techniques to compose humorous poems that cannot be found in Chinese poetry.

In the second section, I review the interpretation of the poem "Watching a spider make a web", and point out that Tadaomi composed a comical poem that could not be found in Chinese poetry by parodying Chinese classics.

In the third section, I pick out two poems, "On shrimp, thirty words in all" which focused on red shrimp and "Seeing a paper kite on the wall of the Jityu bureau, then present a poem to my colleagues" which focused on kites that never flew in the sky, to reveal Tadaomi's bitter self-mockery contained in his humorous expressions.

In the fourth section, I choose two poems in which Tadaomi talks about his daily life. For the poem "Begging Shige13 to Pick Tea", I disagree with the conventional interpretation and figure out that it was based on a humorous idea that Tadaomi wanted to exchange his poem for his friend's tea. And this kind of idea was influenced by Bai Yi's poem. For the poem "Getting very drunk, then present a poem to all guest", I point out that the poem is a humorous depiction of Tadaomi's own experience of drunkenness, taking into consideration the Chinese poems about drinking of Xin Qiji and the legend of Li Guang.

In the fifth section, I reinterpret the poem, "In late spring, under the flowers, many guests toast the success of my son, and I thank them for their congratulations", and point out a new Chinese classic to reveal the wit that abounds in the whole poem.

【キーワード】島田忠臣、漢詩、諧謔的表現、平安朝文学、中国古典詩歌
Shimada Tadaomi, Kanshi, Humorous expressions, Heian literature, Classical Chinese Poetry

はじめに

島田忠臣（828-892）は、今日では菅原道真の岳父として知られるが、平安朝では屈指の詩人として「当代之詩匠」や「田詩伯」（伯は宗伯つまり宗匠の意）と讃えられた。現存の忠臣の詩集『田氏家集』（上中下三巻）には、計 213 首の詩が収められている。

忠臣の漢詩創作の特徴について、興膳宏氏[1]は「忠臣は宮廷詩人であったが、その創作の場は宮中だけに限定されず、個人の心情を詠う作品が過去の詩人たちに比べて、ずっと増えている」、「漢詩が個人の叙情の具として、一段と深化した状況を忠臣の詩に認めてよいであろう」と評している。

その詩風といえば、平明なスタイルで白居易の詩に学んだところが多い。忠臣の詩に関する従来の研究も、主に白詩との影響関係に注目している[2]。一方、忠臣の漢詩には和歌的な発想や詠法の影響が存したことも指摘[3]されている。筆者[4]も忠臣の哀傷詩に焦点を絞って、その和歌的な発想の一端を考察したことがあり、その考察の中で、忠臣の哀傷詩には中国にも日本にも類を見ない忠臣独自の詩想の展開があることを指摘した。

このように、忠臣の詩才には実に特異な一面があるわけだが、本稿では、引き続き忠臣の詩才の真価をはかり直すことにしたい。従来あまり注目されてこなかったが、実は忠臣の詩には、滑稽を交えたり笑いを誘ったりする表現が多い。中国詩歌であれば、このような諧謔的表現を有する詩作を、「俳諧体」や「俳諧詩」「諧趣詩」「詼諧詩」「諧戯詩」「幽默詩」といった定義・概念を用いて呼ぶところである。だが、「俳諧」という概念には「俳諧歌」「俳諧連句」「俳句」といった日本の詩型文芸との絡みやズレもあるし、「ユーモア」はそれ自体極めて西洋的な概念である。また、諧謔に富む中国詩歌の特徴は、杜甫の「戯作俳諧体遣悶二首（戯れに俳諧体を作り悶を遣る二首）」のように、作者自身が往々にして作品の題に「戯」や「俳諧」などの語で示すところにある。例えば、忠臣が師として仰いだ白居易には「戯」を詩題に持つ詩が九十首もある。忠臣の弟子かつ婿である道真も「講書之後、戯寄諸進士（講書の後、戯れに諸の進士に寄す）」（『菅家文草』巻二・082）[5]など「戯」を題に持つ詩を六首作った。しかし、現存の忠臣の詩には「戯」を詩題に持つものは一つもない。以上のような理由から、本稿では「俳諧詩」などの概念を用いず、忠臣の詩の諧謔的表現と見えるものに焦点を当て、その詠出の手法や意義について検討していく。

従来、忠臣は総じて「穏和重厚な学者はだの詩人」[6]と考えられてきたが、本稿の検討は、忠臣の知られざる諧謔的な一面を浮き彫りにすることに繋がるだろう。

以下、まず植物を主題とする忠臣の二首の詩を取り上げて、その諧謔的表現によく用いられる二つの基本的な詠法を見ていきたい。

1 興膳宏著『古代漢詩選』（研文出版、2005 年）第七章「島田忠臣 ――叙情の深化」参照。
2 金原理「嶋田忠臣と白詩」（同氏著『平安朝漢詩文の研究』所収、九州大学出版会、1981 年）、三木雅博「嶋田忠臣と白詩」（『白居易研究講座』第三巻、勉誠社、1993 年）、新間一美「わが国における元白詩・劉白詩の受容」（『白居易研究講座』第四巻、勉誠社、1994 年）、拙稿「島田忠臣の交友と白詩」（『東京大学国文学論集』第 12 号、東京大学文学部国文学研究室編、2017 年 3 月）など。
3 三木雅博「島田忠臣と在原業平 ――漢詩が和歌を意識し始めた頃――」（『平安朝漢文学鉤沈』和泉書院、2018 年。初出は 2001 年）参照。
4 拙稿「島田忠臣の哀傷詩について ――和と漢のあいだ――」（『和漢比較文学』第 61 号、和漢比較文学会編、2018 年 8 月）
5 本稿の道真の作品番号は、岩波日本古典文学大系『菅家文草 菅家後集』（川口久雄校注、1966 年）に従う。その作品番号でいえば、「戯」を詩題とする道真の詩作は 082、097、109、280、306、432 の六首である。
6 川口久雄著『三訂 平安朝日本漢文学史の研究 上』（明治書院、1975 年）184 頁。

一、薬の詩、桜の詩

まずは、「薬」（『田氏家集』巻下・132）[7]と題して、枸杞を詠じる次のような詩である。

種薬経春撲地生　　薬を種ゑ　春を経るに　地を撲ちて生ず
蒙茸払暑小庭栄　　蒙茸　暑を払ひて　小庭に栄ゆ
人来擡挙応驚手　　人来りて擡挙せば　応に手を驚かすべし
枸杞叢頭吠犬声　　枸杞（くこ）の叢頭　犬声吠（ほ）ゆ

二句目の「蒙茸」は、乱れるさまのこと。前半二句は、庭の中の枸杞（薬樹）の繁る状態を述べている。後半二句は、枸杞を持ち上げようとすれば、その瞬間、きっと枸杞の根もとから犬の吠え声に驚かされて手を引いてしまうだろう、という軽い冗談となっている。

この冗談を理解するには、枸杞と犬との関係を知る必要がある。両者の関係について、『注』は「枸杞の「精霊」が犬になる」[8]という伝説を紹介し、白居易の「不レ知霊薬根成レ狗、怪得時聞二吠レ夜声一」や劉禹錫の「枝繁本是神仙杖、根老新成瑞犬形」といった枸杞関係の先行詩句をも指摘している。

この詩のように、忠臣という詩人は、中国の漢詩を多分に受容・模倣しながら、中国の詩人と同じような諧謔の詠出を試みていることがまず看取できよう。

一方、和歌の発想や詠法を取り入れて、中国の漢詩には見いだせない諧謔を詠んだりすることもある。「惜桜花（桜花を惜む）」（『田氏家集』巻上・054）という詩はその代表と言えよう。

宿昔猶枯木　　宿昔　猶ほ枯木の如く
迎晨一半紅　　晨を迎へて　一半紅なり
国香知有異　　国香　異なること有るを知り
凡樹見無同　　凡樹　同じきこと無きを見る
折欲妨人鎖　　折らむとせば　人を鎖もて妨げむと欲す
含応禁鳥籠　　含まむとせば　応に鳥を籠に禁ずべし
此花嫌早落　　此の花　早く落つることを嫌ふ
争奈賂春風　　争奈（いかん）せむ　春風に賂（まひな）ふことを

この詩の頷聯で、桜の香りを「国香」と、つまり桜の花を日本の国花として詠んでいることは注目を集めてきた。

頸聯に見られる、桜の枝を折ろうとする人を鎖でつないで邪魔したい、桜の花を食おうとする鳥を籠に閉じ込めたいといった発想は、多分に滑稽を交えたものである。

尾聯の、桜の花を早く散らさぬよう、春風に賄賂を贈りたいという発想が興味深い。山本登朗氏[9]が指摘しているように、風のような自然物に物を贈り何かを依頼しようという発想は、中国詩にはあま

7 本稿の『田氏家集』の引用は、原則として小島憲之監修『田氏家集注』（和泉書院、1991-1994 年）による。読み下しは、『田氏家集注』と『田氏家集全釋』（中村璋八・島田伸一郎、汲古書院、1993 年）を参照した上で私に施したものである。以下、両書をそれぞれ『注』と『釈』と略する。なお、両書の作品番号は同じであり、それに従う。
8 この解釈も可能だが、白居易と劉禹錫の先行詩句を見れば分かるように、枸杞の根が犬（の形）になると言う方がより正確だろう。
9 山本登朗「賄賂と和歌と漢詩　――島田忠臣の一首――」（岩波新日本古典文学大系『月報』51、1994 年 2 月）。

り例のないことだが、和歌の世界にあってはごく一般的に見られる類型的な表現である。つまり、このような諧謔性は、和歌の発想や詠法に基づくものである。

以上、植物を詠題とする二首の詩を例として、忠臣の詩にみられる諧謔の有り様を垣間見た。次は動物を詠題とする詩を検討する。

二、蜘蛛の詩

まず、「見蜘蛛作網（蜘蛛の網を作るを見る）」（『田氏家集』巻上・067）という詩を取り上げたい。

蜘蛛作網日昏時　　蜘蛛　網を作る　日の昏（く）るる時
結目何唯一縷資　　目を結ぶに　何ぞ唯だ一縷の資のみならむ
能設紀綱非汝術　　能く紀綱を設くるは　汝が術に非ず
不因機杼是誰糸　　機杼に因らざるは　是れ誰が糸ぞ
秋寒綴露牽珠貫　　秋寒くして　露を綴りて珠貫を牽く
風払黏花動綵帷　　風払へば　花を黏して綵帷を動く
四面密成終未漏　　四面　密（みつ）に成りて　終に未だ漏らさず
殷湯合有祝来詞　　殷湯　合（まさ）に来たるを祝（いの）る詞有るべし

首聯は、蜘蛛が網を作る時間と道具（糸一本）を述べている。中間二聯は網を張る蜘蛛の妙技に感嘆するもので、特に頸聯上句の「秋寒綴露牽珠貫」という表現が、文屋朝康（あさやす）の「秋の野にをくしらつゆは珠（たま）なれやつらぬきかくる蜘蛛のいとすぢ」（『古今和歌集』巻四・秋歌上・225）という歌の表現と類似していることは、新日本古典文学大系『古今和歌集』の脚注に指摘されている通りだ。

各詩句の語釈と解釈は諸注に詳しいが、ここでは特に尾聯に注目したい。

上句は、蜘蛛の網が獲物を逃すことはないほどびっしりと張りめぐらされていることを述べている。下句の「祝」とは、祈ることを指す。この尾聯には明らかに、殷の聖王と称された湯王の人徳にまつわる名高い故事が用いられている。『史記』（巻三・殷本紀）によれば、湯王が町のはずれに出かけると、野に網を隈なく張りめぐらし「天下四方より来るものは、みな我が網にかかれ」と祈る一人の猟師に出会い、それでは禽獣が絶滅してしまうと危惧し、その網の三方を取り除かせ、「左へ行きたいものは左へ行け、右へ行きたいものは右へ行け、わが命令に従わない者だけ我が網にかかれ」と祈願した。この話を聞いた諸侯はみな、禽獣にまで及ぶ湯王の徳の偉大さを称賛したという。

詠まれた典故は明らかであるが、この尾聯とくに下句について、従来の解釈はまだ忠臣の真意を十分に汲みとっていないように思われる。

『釈』は「殷湯合に有るべし　来るを祝るの詞」と訓んで、「ちょうど殷の湯王が、野の網の三方を除いて、鳥獣の来るのを祈ったという、かの故事の中の言葉が（この蜘蛛の美事な網への讃辞として）必要だ」と訳している。『注』は「殷湯　合に祝り来（きた）す詞有るべし」と訓んで、「いまや殷の湯王が網の三面を破って獣たちをまねいた言葉がなければなるまい」と訳している。この二つの訳文では、主語であるはずの「殷湯」と、述語の「有」との関係がうまく訳されていないと思われる。「合」は道理や推量の上から当然であるとする判断をあらわす助動詞であり、「祝来詞」は明らかに目的語

である。だとすれば、「祝来詞」という祈りの言葉を発する主語は、やはり「殷湯」ということになる。

つまり、蜘蛛の精緻に張りめぐらされた網に対して、聖徳高く慈悲深い湯王なら、当然座視するわけにはゆかず、きっとかの有名な「祝来詞」（「左へ行きたいものは左へ行け……我が網にかかれ」）を口にするだろうというのが詩の趣旨なのだ。なるほどここには忠臣ならではの諧謔が発揮されている。その諧謔的な口ぶりを試訳するなら、「おい、お前（蜘蛛）はこんなに網をびっしりと張りめぐらしているからには、あの慈悲深い聖王の殷湯は、きっとうるさく言ってくるだろうよ」となるだろうか。

以上のように、この詩に見られる秀逸な諧謔の特徴を明らかにしたが、ここではなおその詠出の意義について検討してみたい。

前述の「薬」の詩と同じく、ここにも中国の典故が用いられているが、この典故の用い方、特に蜘蛛と聖王を並べる詠法は、中国の詩賦には類例が見当たらないのではないだろうか。殷の湯王が網を取り除いて祈ったという典故は、往々にして帝王の仁徳を称える際に使われる。『懐風藻』[10]にも「冠二周埋レ尸愛一／駕二殷解レ網仁一」（042「五言春日侍宴応詔」）や「錯繆殷湯網／繽紛周池蘋」（087「五言侍宴」）と傍線が付されているように、帝徳讃美の好題材として詠まれていたのである。ところが、忠臣の詩において、この典故は諧謔的に詠み込まれており、もっぱら蜘蛛の網の出来映えを賛嘆するための仕掛けになっている。これこそ忠臣の独創に他ならない。このような詠法は、「殷湯解レ網」という典故への一種のパロディー[11]と言えよう。

では、なぜこのような詠出が可能になったのか。蜘蛛を詠む詩賦の類型については、『注』は当該詩の解題部分で述べたように、二つに大別される。すなわち、一つは蜘蛛の網の出来映えを賛嘆するようなもの、もう一つは蜘蛛が殺生を事とするのに託けて小人を諷するようなものである。どちらかといえば、後者のほうが中国の詩賦に多く見られる。残酷な捕食者というイメージの強い蜘蛛を、聖王の殷湯と並べて詠むことは、儒教の倫理観を尊ぶ中国の詩人たちにとってはあり得ない発想だったに違いない。

中国の詩人に比べて、平安朝の詩人たちは、蜘蛛をあまり忌み嫌わなかったようだ。例えば、菅原道真の「暁月、応製」詩（『菅家文草』巻五・355）に「秋腸軟レ自二蜘蛛縷一／寸寸分分断尽還」とあるのは、秋のもの思いを、蜘蛛の糸の柔らかさ、はかなさ、断ち切れやすさに喩えている。また、その名も「蜘蛛」（『菅家文草』巻五・416）という詩は、次の通りである。

微虫猶有レ巧、結レ網自含レ情。稟レ気安レ身小、随レ風転レ質軽。
簷前寛得レ地、籬上暫全レ生。万物皆如レ是、応レ知二造化成一。

この詩も蜘蛛を悪しき生き物としては描いていない。この詩について、川口久雄氏は補注において次のように述べている。

10 本稿の『懐風藻』の引用および作品番号は、岩波日本古典文学大系『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』（小島憲之校注、1964年）による。
11 因みに、忠臣には「見叩頭虫自述寄宗先生（叩頭虫を見て自ら述べて宗先生に寄す）」（『田氏家集』巻下・192）という詩があり、それが晋の役人だった傅咸の「叩頭虫賦」のパロディーらしいことを川口久雄氏は指摘している。同氏著『三訂　平安朝日本漢文学史の研究　上』（明治書院、1975年）188頁参照。

唐の孟郊の「蜘蛛諷」にみられるように、中国で蜘蛛を詠ずる詩は多く、あみをはって虫を殺す性を憎むことをモチーフとする。蜘蛛が網の上で安らかにしているのをたたえるような詩は管見に入らない。

このように、忠臣が蜘蛛と湯王を並べて詠出してみせたのは、日本の詩人たちの蜘蛛に対する感性が中国のそれと大きく違っていることと関係があるだろう。中国の詩賦では、蜘蛛を悪しき生き物として詠む習慣があるが、日本の詩歌では蜘蛛の網や糸そのものを虚心に観察し詠じるのが好まれたようである。

忠臣の詩における諧謔の発露には、以上に述べたように愉快なものもあるが、苦い自嘲や不遇を漏らしたものもある。次節では、このような側面について検討したい。

三、海老の詩、凧の詩

まず、「賦海老、卅字絶句（海老を賦す、卅字絶句）」（『田氏家集』巻上・057）という詩を取り上げる。上述の蜘蛛の詩と違い、この詩は主題の海老を敷衍することで、詩人の境遇を海老に投影してみせる。

脱泉枯又槁	泉を脱して枯れ又(ま)た槁(か)る
跼脊長髯称海老	跼脊長髯(きょくせきちょうぜん)　海老と称す
応似朝中緋衣一大夫	応に朝中緋衣(てうちゅうひい)の一大夫に似たるべし
形消命薄不作明時好	形消え命薄くして明時の好きを作(な)さず

前半二句は、跼(せぐくま)る脊と長い髯を持つという老醜の海老を描き出している。三句目に「緋衣」とあり、忠臣自身の境遇が言及されている。令制の服色の規定では、五位の官人が着用するのが浅い緋色なのである。

つまり、この詩は忠臣の不遇時代の作品である。忠臣は白居易の江州左遷時代の詩作の詩語や詩想を借りて、自らの不遇の境遇を賦題の「海老」に重ね合わせている。これについては、拙稿「島田忠臣の不遇と「大隠」」[12]（以下「前稿」と称す）で詳しく述べたことがあるが、ここでなお強調したいのは、「緋衣」の緋という色である。この緋色は、官位を示す色であると同時に（茹でた後の）海老の色を指しているのだろう。

忠臣以前の中国詩では、海老を主題とする詩歌はとても少ない。さらに、海老の緋色に注目する作品の出現は、宋代以降を待たなければならない。例えば、北宋の汪藻（1079-1154 年）という詩人の「食レ蝦」詩に「纖指剥二軽紅一」という詩句がある。忠臣の詩では、海老を食べることについて直接言及していないが、この海老の色に焦点を合わせれば、それが茹でた後の海老であることが分かるだろう。加えて、「賦二海老一」といった「賦〇〇」の詩題は、独詠ではなく、集団での詠作の可能性が極めて高い。集団、おそらく宴会の中で、緋色の衣を着用している忠臣は、目の前にある緋色の海老に自己を重ね合わせて滑稽さを表現しているが、そこには苦い自嘲が込められているのである。

12『国語国文』第 86 巻第 11 号、京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店、2017 年 11 月。

次に取り上げたいのは、「看侍中局壁頭挿紙鳶、呈諸同志（侍中局の壁頭に紙鳶を挿めるを看て、諸同志に呈す）」（巻上・048）という詩である。この詩においても、忠臣はその不遇を諧謔的に漏らしている。「侍中局」は、蔵人所の中国風の言い方である。そこの壁に掛けられている「紙鳶」すなわち凧を見て所感を述べた作品である。

風前試翼紙鳶新　　風前　翼を試みるに　紙鳶新し
何事由来挿壁塵　　何事の由来ぞ　壁塵に挿すは
了得行蔵能在我　　了得る　行蔵の能く我に在ることを
憐他飛伏必依人　　憐他む　飛伏は必ず人に依ることを
応同鶴滞重皐日　　応に鶴の重皐に滞る日に同じかるべし
孤負鶯遷喬木春　　孤り鶯の喬木に遷る春に負く
向上碧雲如有分　　碧雲に向上するに如分有らば
憑君莫久縮糸綸　　憑はくは君　久しく糸綸を縮むること莫かれ

前稿でも、この詩について触れたが、ここでは少し違う角度から述べていきたい。凧（紙鳶）を主題とする忠臣以前の漢詩はあまり多くないし、凧が詠われる際も往々にしてその空を自在に飛ぶ姿が注目される。ところが、当該詩は大空を舞うことのない凧に焦点を当てている。

首聯は、新しい凧が塵にまみれた壁に放置されている様子を述べている。頷聯[13]は、凧が飛べるか否か、その境遇はもっぱら他人に掌握されている現実にずばりと触れている。しょせん人に操られるものという凧のこの特徴は、以下に見るように、元稹の「有鳥二十章」（『元氏長慶集』巻 25）の七番作でも言及されている。因みに、唐詩では凧を主題とする詩作は少ないものの、元稹は白居易文学圏の重要な存在として、その詩文は平安人にも大いに受容されていた。

有鳥有鳥群紙鳶　　鳥有り鳥有り　群の紙鳶
因風仮勢童子牽　　風に因りて勢いを仮りて　童子牽きたり
去地漸高人眼乱　　地を去りて漸く高く　人眼乱れる
世人為爾羽毛全　　世人　爾の羽毛全うしたりと為ふ
風吹縄断童子走　　風吹きて縄断ち　童子走げ
余勢尚存猶在天　　余勢尚ほ存し　猶ほ天に在れど
愁爾一朝還到地　　愁ふらくは　爾一朝に地に還り到り
落在深泥誰復憐　　深泥に落ち在らば　誰か復た憐むや

首聯は、童子に引っ張られながら、風の勢いに乗る凧の群れを描いている。頷聯は、それらの凧がだんだん高く飛翔してゆき、地上にいる人から見れば、凧がその翼の力を発揮したと見做されることを述べている。頸聯は、凧の糸が風に吹かれて断たれ、牽引役の童子もいなくなってしまったにも関わらず、なお余勢を借りて空を舞い続けていることを言う。ここに、凧の運命はしょせん他人に握ら

13 頷聯下句の「憐他」の訓読については、後藤昭雄氏の「平安朝詩文の「俗語」」（同氏著『平安朝漢詩文の文体と語彙』、勉誠出版、2017 年、369 頁）に指摘があり、それに従う。

れているものでしかない、という事実がはっきり表れている。そして、尾聯で元稹は、それらの凧がやがて泥に堕ち、誰にも顧みられることはないだろう、と案じている。

この詩は表面的には凧のことを描いているようだが、実際は、権力者の威勢を笠に着て威張っている連中を凧の群れに喩えて批判している。忠臣は、まさしく元稹のこの詩の手法を学んで、空を飛ぶことのない凧を描き出すと同時に、自らの不遇な現状を諧謔的に詠出しているのだ。

忠臣の詩に戻ろう。頷聯で凧の運命が他人に握られていることを述べた後、忠臣は頸聯において、壁に放置された凧を、深い沢にはまって動けない鶴や、春になっても依然として高い木に登れない鶯に喩えている。そして、尾聯で蔵人所の友人に「どうかこの凧の糸を縮めずに、その能力のあるがままに飛ばしておくれ。それと同じく、どうか私にかかわる「糸綸」（＝詔勅） の部分を縮めずに繰り広げて見せておくれ」と呼びかけるに至る。

頸聯二句の二つの比喩には、それぞれ『毛詩』（小雅）の「鶴鳴」篇と「伐木」篇の典故を用いていることが興味深い。典故の使用によって詩に厳かな雰囲気を濃厚に蓄えた上で、その厳かさを尾聯の述懐によって一挙に解消し、味わい深い滑稽みを生み出している。

以上、諧謔に包んで不遇を託つ忠臣の二首の詩を検討した。この二つの詩は、いずれも海老、凧などの具体的対象を主題としており、つまり対象に仮託して感懐を述べたものだった。次は忠臣の日常生活を詠じる詩から諧謔に溢れた作を取り上げる。

四、茶摘みを乞う詩、酔漢の詩

まず、「乞滋十三摘茶（滋十三に摘茶を乞ふ）」（『田氏家集』巻下・198）という詩から見てゆこう。

不労外出好居家　　外出するを労せず　家に居るを好む
大抵閑人只愛茶　　大抵　閑人は只だ茶を愛(この)む
見我銚中魚失眼　　我が銚中に　魚　眼を失ふを見
聞君園裏茗為牙　　君が園裏に　茗　牙を為すを聞く
詩行許摘何妨決　　詩行(ゆ)きて　摘むを許すに何ぞ決するを妨げむや
使及盈筐可得誇　　使及(つかひいた)りて　筐に盈つれば誇るを得べし
庭樹近来春欲暮　　庭樹　近来　春暮れむと欲す
莫教空腹猶看花　　空腹にして猶ほ花を看しむこと莫れ

忠臣は首聯で、自宅でのんびりと過ごしたい自分は閑人で、茶飲みという嗜好を持っていると告白する。そして頷聯では、まず茶のない現状を訴え、なんでも滋十三の園内では茶の芽がすでに伸びているそうですね、と続く。上句の「魚眼」は水が沸騰するときの泡を喩える表現であり、諸注が指摘するように「銚中魚失眼」とは茶器の銚子に沸騰すべき泡がなくなったこと、つまり手元の茶が尽きたことを意味している。

頷聯で示される状況を踏まえれば、頸聯で茶を乞い願うことこそ、理路整然たる詩の展開と言えるだろう。ところが、この頷聯に溢れる面白みが、従来の解釈では十分に味わえないのではないかと思われるのである。

『釈』は「詩行はば摘むを許す　何ぞ決めたるを妨げむや／盈筐するに及ばしむれば　誇りを得るべし」と訓んで、「詩を作ったならば茶を摘むのを許可するという（約束）。それをどうして今さら反古になどできましょうか、いや、できますまい。それで、かごいっぱいにも及ぶまで摘ませたならば、誇りにすることができるに違いありません」と訳している。一方、『注』は「詩行（おこな）ひて摘むを許すこと　何ぞ決を妨げむ／盈筐に及（いた）らしむれば　誇りを得べし」と訓んで、「詩をうたいながら茶を摘んでも、一向にかまわない。籠に茶が満ちさえすれば、それで十分に誇るに足ることだ」と訳している。

二つの注釈書は、いずれも上句の「行」の字を「行（おこな）う」と訓んでいるが、「詩行」についての解釈は分かれている。『釈』は詩を作る意で解釈しているが、その訳文では、作り上げた詩と茶摘みの許可との間に、いかなる因果関係があるのかはっきりしない。一方、『注』はその語釈では、「一句は、詩をうたいながら茶摘みを行ってもなんら支障をきたすことはなかろう」と解釈しているように、「詩行」を「詩をうた」う意と採っているが、その場合、詩をうたうと茶摘みを行なうという二つの動作がなぜ並行して行われるのか疑問視せざるを得なくなるだろう。

この上句と下句をいかに関連付ければ合理的な解釈を得られるのか。一案だが、「行」を「行（ゆ）く」、すなわち移動の意味で解釈し、「詩行」を「詩が行ったら（詩が届いたら）」という意で解すれば、文脈ががらりと変わるのではないか。

下句の「使」の字は、使役を表す助動詞として「しむ」と訓まれてきたが、律詩の対句では、対応する字は原則、同じ品詞であり、上句の対語が名詞の「詩」である以上、下句の「使」も名詞として扱うほうが自然だろう。ここの「使」は、忠臣のこの詩を滋十三邸に届ける使者（召使い）を指しているのかもしれない。それは同時に、摘んだ茶を忠臣邸に持ち帰る使者でもあるのだろう。

この二句を試訳するなら、「私の詩があなた（滋十三）のおもとに届いた以上、どうして茶摘みを許すご決断を妨げるものがまだあろうか。（いや、きっとないだろう。）私の使者が貴邸に至り、その筐に茶をいっぱい摘んで持ち帰るなら、それは私にとって誇りである」となるだろうか[14]。砕けた表現に換えるなら、「私の詩はあなたの茶と引き換える価値があるだろう。私は決して欲張りではないよ。一首の詩を一筐の茶に引き換えれば、それでもう満足だ」という、なんとも軽妙かつ機知に富んだ口ぶりなのである。

自らの詩の価値を主張し、それを茶に引き換えたい願望を頷聯で表明した後、尾聯では「うちの庭の木は間もなく暮春を迎えるから、どうか茶も飲まず空腹のままでその花を観賞させないでほしい」（試訳）と、切羽詰まって茶を乞う窮状を、たわむれの口ぶりで訴えている。

以上、茶を乞う忠臣の詩を分析してみた。この詩を通じて、忠臣の人柄に並外れて諧謔的な一面があったことを確認できると同時に、忠臣と滋十三との親しい交際を窺うこともできた。

ところで、この詩と類似する題を持つ唐詩があると『注』には指摘されており、それはすなわち姚合の「乞二新茶一」（『姚少監詩集』巻 8、『全唐詩』巻 500）である。『注』は当該詩の内容に言及していないが、ここでは詩の本文を掲げてみる（読み下しは私に施したものである）。

嫩緑微黄碧澗春　　嫩緑　微（わづ）かに黄い　碧澗の春

14 一方、「使」を「しむ」として解釈すれば、下句は「筐に茶葉をいっぱいにも及ぶまで摘ませてもらえれば、私にとって自慢話ができるのだ」と訳すことになる。茶葉を筐にいっぱい摘ませる結果に変わりはない。

採時聞道断葷辛　　採る時に聞道く　葷辛を断つことを
不将銭買将詩乞　　銭を将て買はず　詩を将て乞ふ
借問山翁有幾人　　山翁に借問す　幾人か有る

姚合の詩は、詩でもって茶と交換したい考えをはっきりと示している。この発想は、忠臣の詩との最大の共通点と言えよう。姚合（775-855）は中唐の詩人で、白居易と同じ時代に活躍しているが、『日本国見在書目録』にはその詩文の伝来が確認できないため、忠臣がこの詩を見たかどうかは判断しがたい。いずれにせよ、前述した忠臣の詩の諧謔は、姚合の詩には感じられない。一方、これも茶飲みを好んだ白居易の詩歌に目を転じてみると、次の詩に見られるような戯けに気付かされる。

金花銀椀饒君用　　金花　銀椀　君の用ふるを饒す
罨画羅衣尽嫂裁　　罨画　羅衣　嫂の裁つを尽くせよ
覓得黔婁為妹壻　　覓め得たり　黔婁を妹壻に為し
可能空寄蜀茶来　　空しく蜀茶を寄せ来るに可能

白居易の妻の兄が東川節度使に任命された折り、妻に代わりその兄夫婦を戯けて祝した二首の絶句「楊六尚書新授二東川節度使一、代レ妻戯二賀兄嫂一二絶」の二首目（『白氏文集』巻 66・3302）[15]である。

前半二句は、兄夫婦は裕福で豪華な食器や服飾が使えると述べている。三句目の「黔婁」は貧しかったが、仕官を拒んだ中国古代の隠士である。白居易はここで自らのことを貧しい「黔婁」に喩えている。それが裕福な兄夫婦と好対照をなすことになる。

結句には白居易が好きな「蜀茶」が言及されている。新釈漢文大系本は、冒頭の「可能」を「どうして……できるだろう。まさか……だろう」と解釈し、当該句を「空しく蜀茶を寄せ来るに能ふべけんや」と訓んでおり、後半二句を「貧乏で仕事に就かない黔婁を見つけて妹の婿にしたのだから、まさか蜀のお茶くらいしか送ってこないなんてことはないでしょうね」と訳しているが、この「可能」は「もしかしたら……かも知れない」[16]と解釈すべきではないだろうか。この二句を試訳してみると、「黔婁のような貧しい人（白居易）をあなた達の妹の婿にしたのだから、もしかして蜀（兄の任地）のお茶を送ってくださるばかりかもしれない（こちらは貧しくてまともなお返しは何もできないのである）」となるだろうか。

この詩は開成元年（836）の作である。当時、白居易は 65 歳で、太子少傅分司東都という閑官に就きながら、洛陽で悠々自適な晩年生活を送っていた。決して貧しくはない。したがって、蜀茶を送ってもらうばかりでは、相手にとって損になるだけだ。これは言うまでもなく白居易一流の冗談である。こうした白詩の影響もあり、自らの詩と滋十三の茶を等価交換するという忠臣の諧謔的な発想が生まれたのだと考えられる。

茶摘みを乞う詩の分析はここまでにして、次は「毒酔吟呈座客（毒酔吟、座客に呈す）」（『田氏家集』巻下・195）という詩を取り上げたい。

15 本稿の『白氏文集』の引用は新釈漢文大系本（明治書院、岡村繁など校注）によるが、読み下しは改めたところがある。括弧内に花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、1974 年）所収の「総合作品表」の作品番号を示す。
16 『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社）を見ると、この意味に当たるのは（3）の「也許」で、そこに挙げられている最古の用例は、晩唐詩人の韓偓の「偶題」という詩の「蕭艾転レ肥蘭蕙瘦、可能天亦妬二馨香一」であるが、白居易の当該詩はより古い例となるだろう。

飲酒卯前及百鍾　　酒を卯前に飲みて　百鍾に及び
黄昏主客酔相従　　黄昏には　主客酔ひて相ひ従ふ
孤株聳処呵蹲虎　　孤株　聳(そび)ゆる処　蹲虎を呵(どな)り
片石低時叱伏龍　　片石　低(ひく)まる時　伏龍を叱る
盆水驚心為四瀆　　盆水も心を驚かせて四瀆と為り
庭山望眼是千峯　　庭山も眼に望めば是れ千峯
敬言遂未輸童殺　　言を敬(つつし)みて遂に未だ童殺を輸(いた)さず
何必醒来更改容　　何ぞ必ずしも醒(さ)め来りて更に容を改めんや

詩の本文の四角で囲んだ部分は、いずれも従来難解とされてきた箇所である。ここでは王暁平[17]の指摘に従い、解釈を試みる。

首聯は主客が酒を長時間かつ大量に飲んでみな酔っていることを述べる。中間二聯は酔っ払った人々の状態を諧謔的に描いてみせる。頸聯は意味が分かりやすく、遣水を大江大河と、築山を連峰と見誤ったと、つまりは酒飲みの眼に映る錯覚を詠んでいる。この種の錯覚は酒に酔えば誰しも経験するものだが、忠臣はいささか誇張的な言葉遣いでそのような酩酊状態を表現している。管見の限りでは、これに類する表現はそれ以前の漢詩にはほとんど見いだせない。忠臣の表現力の高さはこんなところにも見て取れよう。

頷聯二句も酔眼がもたらす錯覚を描いたものだが、一つ厄介な箇所がある。下句の「叱」は、『田氏家集』の諸本ではいずれも「吨」となっているが、これでは意味が通じない。『釈』と『注』はそれぞれ「眈」と「眈」に改めているが、それでもやはり釈然としない[18]。ここで注目すべきなのが王暁平氏の新説で、文意と字形から考え直し、「吨」を「叱」と見ている。「叱」と考えれば、対語の「呵」と同義語[19]になり、後述するように頷聯全体の意味がきれいに通るため、妥当な読みと言える。王氏はこの二句を、「互文」[20]の表現と見なし、「酔っぱらって、一本松がそびえ立つところで、地面に低く横たわっている石を見て、それを虎や龍と見誤って、喉を引っ張り上げて大声で叱責した」（原中国語簡体字）と解釈している。一点だけ注文をつけるなら、「互文」と見なさないほうがより自然に意味が通じるのではないだろうか。この二句を試訳するなら、「木の根もとが一つだけそびえるのを、うずくまる虎と見誤ってどなった。庭石一つ平らかに置かれたのを、伏せている龍と見誤って叱った」となるだろうか。上の王氏の解釈に筆者が傍点を付したように、王氏は当該詩の「孤株」を「孤松」と見ているが、筆者は『注』の解釈と同じく、木の根もとの意で理解している。木の根もとの形をうずくまる虎になぞらえるほうが違和感がないからである。

尾聯上句も従来難解とされてきた箇所だが、ここもまた王暁平氏の「敬言遂未輸童殺」という案に従いたい。『田氏家集』の諸本では「警遂未輸童□殺」となっており、一文字の欠落がある。『釈』

17 王暁平「『田氏家集』的写本学研究」、『日語学習与研究』2016 年第 4 期。

18 この頷聯を、『釈』は「一株の木のそびえ立つ所に、酔ってうずくまっている虎が笑い声を上げ、一片の庭石の低い時に地に伏した龍のように、居眠っている者もいる」と訳しており、『注』は「一もとの木が聳えるのを、うずくまる虎がうなるかと見、庭石一つ平らかに置かれたのを、伏した龍がねめまわしているかと見紛う心地」と訳している。

19 漢語には「呵叱（かしつ）」という語があり、大声でしかるの意である。

20 『日本国語大辞典（第二版）』の「互文」条：対をなしているような表現で、一方に説くことと他方に説くことが、互いに相通じ、補いあって文意を完成する表現法。たとえば、「天長地久」といって「天」と「地」が、ともに「長」であり「久」であることをいう類。

も『注』も「警遂未輸童羊羖」と欠落の字を「羊」と推定しているが、そうすると平仄が合わず、意味も分かりにくかった。王氏の卓見を要約すれば、そもそも当該句には欠字などなく、最初の二文字はもともと「敬言」であったはずが、書写の過程（縦書き）で「警」と一文字に誤写されてしまったのではないかとなる。

上句の「童羖」は、角のない雄羊を意味し、つまりありもしないものを指す。そして、「輸二童羖一」とは、王氏の指摘通り、元稹の「晩宴二湘亭一」（『元氏長慶集』巻 14）詩の尾聯「甘レ心出二童羖一／須一尽二時荒一」に見られる「出二童羖一」と同じく、存在する可能性もないものを持ち出す、という意味である。この尾聯で忠臣が述べているのは、自分は酔漢となっても言動を慎み、失態を晒したことがないため、酔いが覚めた後も平気な顔をしていられる、という軽い自賛のようなものである。

さて、忠臣の当該詩の意味は明らかになったが、この詩がもつ画期的意義についても少し述べたい。

中国の詩歌には、飲酒詩がおびただしくある。なかには杜甫の「飲中八仙歌」のような名作もあり、賀知章や李白たちの酔態を描いているが、杜甫はあくまで「傍観者」（観察者、記録者）という立場である。それに対して、忠臣は当事者であり、自らの酔態を、とりわけ酔眼がもたらす錯覚をはっきり描き出している。このように、自身の酩酊体験を細かくかつ諧謔的に描き出す飲酒詩は、管見の限りでは、忠臣以前の漢詩にはほとんど見いだせない。

忠臣以後の詩人なら、辛棄疾（しんきしつ）（1140～1207）の作品に忠臣の詩と似たような詩想が確認できる。「西江月・遣レ興」（『稼軒長短句』巻十）という「詞」である。その後半部分において、辛は自らの酔態を次のように描いている（読み下しは私に施したものである）。

昨夜松辺酔倒	昨夜　松の辺（ほとり）に酔ひ倒れ
問松我酔何如	松に「我れ酔ひたるは何如（いかん）」と問へば
只疑松動要来扶	只だ松動きて扶（たす）くるに来らんと疑ひて
以手推松曰去	手を以て松を推して「去（さ）れ」と曰ふ

酔っ払って木の下に倒れている辛は、松に対して「私はどのくらい酔っているのでしょうか」と尋ねたところ、松が無言で辛を助け起こそうとするので、辛は松を手で推して拒んだという酔態描写である。

酔眼がもたらす錯覚を実体験として描き出す点は同じだが、忠臣の詩は、木石を竜虎に擬して叱りつけたのに対し、辛の詞は松を擬人化している。両作とも、動かぬ事物があたかも生き物のように動くさまを酔漢の眼に映る世界として表現した点で軌を一にしているが、体裁の違いは明らかである。周知のように、「詞」はまた「詩余」「長短句」ともいい、「詞」には散文化した表現を持ち込むことが許される。辛の詞で言えば、例えば最後の句の「以レ手推レ松曰レ去」は、散文表現である。この句は、人格が高潔な前漢の龔勝が、同僚の夏侯常を手で推してその調停を拒んだ、という『漢書』（巻 72「王貢両龔鮑伝第四十二」）の記述「勝以レ手推レ常曰レ去」に類似しているとされる。このような散文化した表現に依拠することで、辛はようやく自らの酔態を生き生きと表現してみせているのである。

一方、「詞」と違い、漢詩とくに対句が要求される律詩の場合、限定された文字数の内で文意を展開しなければならない。この意味では、律詩という厳格な体裁に則りながら、中国の詩人に先んじて自らの酔態を細かくかつ諧謔的に描き出した忠臣の詩才は、実に目をみはるものである。詩人としてのその類稀な資質について、ここでなお頷聯に焦点を当て、いま少し検討してみたい。

この聯では、木の根もとや石のような静物を竜虎のうごめくさまになぞらえ酔態を描き出す発想がとにかく興味深い。諸注に指摘はないが、実はこの発想を中国前漢の武将である李広の故事と関連づけて読むと、忠臣の諧謔の奥行きや重層性が感じられるのではないだろうか。『史記』（李将軍列伝第 49）に「広出猟、見二草中石一、以為レ虎而射レ之、中レ石没レ鏃、視レ之石也」とあり、これはすなわち、李広が草の中の石を虎と見誤って射たところ、その鏃（やじり）が石に刺さったという故事である。石を虎と見誤って射た勇敢な将軍李広と、木石を竜虎と見違え大声で叱る酔漢の自分、忠臣の詩に潜むこの滑稽なコントラストに、座上の賓客は腹を抱えて笑ったに違いない。このように、李広の典故を視野に収めて読むと、忠臣の詩の幅と含みある面白みをいっそう感じられるようになるのではないか。第二節で論じた蜘蛛の詩と同様、ここにも中国の典故をパロディー化する手法が明瞭に見て取れる。

上述した二つの詩は、喫茶と飲酒、つまり日常の食生活に関わる作品である。この二首を通して、忠臣の朗らかな性格が窺えると同時に、忠臣と友人たちとの交友関係もいきいきと伝わってくる。次に取り上げる作品は、題にも飲酒が言及されているが、詩の主旨は賓客への感謝を述べるところにある。

五、感謝の詩

詩題は、「暮春花下奉謝諸客勧酒見賀仲平及第（暮春、花の下、諸客酒を勧め仲平の及第を賀せられしに謝し奉る）」（『田氏家集』巻下・173）となっている。

蓬蓽門庭華艶非　　蓬蓽の門庭　華艶に非ず
蒙君潤色作芳菲　　君が潤色を蒙りて　芳菲と作（な）れり
吾家不是登龍種　　吾が家は　是れ登龍の種ならざるに
何事花時雲雨圍　　何事ぞ　花の時に　雲雨の圍（めぐ）るとは

忠臣は、暮春に自宅の庭の花の下で、長男仲平の及第を祝うための祝宴を張っており、その祝宴で賓客たちは、忠臣に酒をすすめて慶賀の意を表している。これに対して、忠臣は上の詩を詠じて賓客に謝意を表したと考えられる。

本来、天気の良い日に晴れ晴れしい祝宴を張るのが望ましいに違いないが、結句の「何事花時雲雨圍」の下に「終日有雲雨、故云（終日雲と雨と有り、故に云ふ）」と忠臣の自注があるように、祝宴当日はあいにく雨だった。ところが、忠臣は持ち前の機知で、生憎の天気という題材を逆手に取って、かくものどかで楽しい気分を醸し出すことに成功している。

起句の「蓬蓽」は蓬（よもぎ）の戸と蓽（いばら）の門の意で、よく自分の家の謙称として用いられている。「蓬蓽門庭華艶非」という句を、『注』は「蓬蓽の門庭　華艶に非ず」と訓んで、「わが茅屋の門庭は、はなやかでも美しくもない」と訳している。とはいえ、「蓬蓽の門庭　華艶に非ず」と訓むなら、漢文の正しい語順は「非二華艶一」であるべきだ[21]。ここは「和習」というより、忠臣が押韻（韻字：非、菲、圍）を意識して、わざと語順を調整したと見るほうがよいだろう。

21 因みに、『釈』は起句を「蓬蓽の門庭　華艶非（かく）る」と訓んで、「貧賤なこの家に、華やかで美しいものが隠れていました」と訳している。恐らく『釈』も起句の不自然な語順に気付いているのだろう。

承句の「蒙君潤色作芳菲」について、『注』は「天子の恵みで、香しい花をひらかせることができた」と、『釈』は「あなた方の懇切なご指導をいただいて、わが子仲平もようやく美しく咲く花となりました」と訳しているように、両書の解釈が分かれている。詩題に「花下」とあるから、この句の「芳菲」は花の芳しいことを指すに違いない。したがって、「君」について、筆者は『釈』と同様に「あなた方」つまり賓客たちを指していると考える。この詩の主旨は賓客に謝意を表すことにあるのだから、賓客の機嫌を取るほうが自然だろうと思われる。

そして、この「芳菲」をもたらした「蒙君潤色」についても、花との関係に注視して考え直してもいいかもしれない。諸注は指摘していないが、杜甫の「喜レ雨」という律詩に「巣燕高飛尽／林花潤色分」とあり、その意味は、林の花は雨に潤ってその色がくっきり鮮やかになるというものである。忠臣の当該詩句が杜甫の詩句の影響を受けたと主張するわけではないが、杜甫の詩例を視野に収めて読むと、忠臣の詩の承句の意味がより一層明瞭になりはしないか。つまり、忠臣の家の花は雨に「潤色」されて「芳菲」となるのである。前半二句を試みに意訳すれば、「貧賤な我が家で、庭の中の花はとっくに暮春らしく艶の状態ではなくなっている。ところが、今日はあなた方（賓客たち）のお陰（「潤色」）で芳しくなっている」となるだろうか。

ところで、この雨がどこで詠じられているかというと、それは結句およびその自注に至ってはじめて言及される。結句、特に「雲雨」について、『注』はめぐみ・恩沢の意も兼ねているとの見解を示し、それが「前句の「龍がのぼる」ことにゆかりのある語としての使用でもある。一句は、いったいこの花の咲く時期に龍がのぼる雲や雨の恩恵即ちこうした及第の恩恵にとり囲まれるとはどうしたことかと、驚喜を改めて述べ、締めくくりとする」と述べている。だが『注』が説明する以上に、「登龍」と「雲雨」との間には、実はもっと緊密で直接的な繋がりがあるのである。

端的に言うと、「登龍」は「登龍門」（『後漢書』李膺伝に由来）の典故を用いている。この龍門は地名であり、『太平広記』（巻 466、水族三、龍門）には、「龍門山在二河東界一、禹鑿レ山断レ門、闊一里余、黄河自レ中流下。両岸不通二車馬一、毎二暮春之際一、有二黄鯉魚逆流而上一、得者便化為レ龍。又林登云、龍門之下、毎歳季春有二黄色鯉魚一、自二海及諸川一争来赴レ之。一歳中、登二龍門一者、不レ過二七十二一。初登二龍門一、即有二雲雨一随レ之、天火自レ後焼二其尾一、乃化為レ龍矣」とある。傍線部に明らかなように、毎年の暮春に龍門を登りきった鯉が龍になり、しかも初めて龍になった時、雲と雨とを伴う、と言い伝えられているのだ。このような伝説を踏まえた上で、当該詩の承句「登龍」は、結句の「雲雨」と確固たる連携をなしているのである[22]。

ここまで理解すると、ようやく後半二句に隠された忠臣の暗黙の意図をくみ取ることができる。それを忠臣の口ぶりで説明すれば、「我が家は登竜門の血筋でもないのに、なぜこのような春日（花時）に雲と雨とに囲まれているのだろうか。なるほどそれは登竜門の血筋であるあなた方（賓客たち）が我が家に集まっているからである」となるだろうか。

空は雲や雨でどんよりとしているものの、この詩の当意即妙の機知には賓客一同どっと笑いこけ、すっきり晴れやかな気分になったと想像できよう。

22 「登龍」と「雲雨」との繋がりは、同時に忠臣の長男の及第を指していると読み取れるだろう。

まとめ

以上、五節にわたって忠臣の詩作八首を取り上げ、その諧謔的表現に注目し、忠臣の人間像を浮き彫りにすると同時に、その詩才がいかに類稀な喜楽の表現に成功しているかを検討してきた。

第一節では、「薬」（132）と「惜桜花（桜花を惜む）」（054）という二つの詩を例として、忠臣の詩の諧謔的表現に用いられる二つの基本的な手法を概観した。前者は忠臣が中国の漢詩に学んで中国の詩人と同様に中国風の諧謔を表現する手法の例であるが、後者は忠臣が和歌的発想や詠法を取り入れて中国の漢詩には見いだせない諧謔を詠む手法の例である。

第二節では、「見蜘蛛作網（蜘蛛の網を作るを見る）」（067）という詩の尾聯の解釈を見直し、蜘蛛と聖王を並べて詠むという、中国の典故を斬新にパロディー化する手法によって、忠臣が中国の漢詩に見いだせない滑稽みを詠い出したことを指摘した。

第三節では、「賦海老、卅字絶句（海老を賦す、卅字絶句）」（057）と「看侍中局壁頭挿紙鳶、呈諸同志（侍中局の壁頭に紙鳶を挿（さしはさ）めるを看て、諸同志に呈す）」（048）という二つの詩を取り上げて、赤色の海老や大空を舞うことのない凧に着目した忠臣の諧謔的表現に含まれている苦い自嘲を浮き彫りにした。

第四節では、忠臣が日常生活をうたう二首の詩を取り上げた。「乞滋十三摘茶（滋十三に摘茶を乞ふ）」（198）という詩については、従来の解釈に異を唱え、白居易の詩の影響を視野に入れた上で、忠臣が自分の詩と友人の茶を等価交換したいという諧謔的な詩想に基づく作であると指摘した。「毒酔吟呈座客（毒酔吟、座客に呈す）」（195）については、王暁平氏が校訂した本文を踏まえた上で、中国の辛棄疾の飲酒作品や李広の故事を視野に入れ、忠臣が自身の酩酊体験を諧謔的に描き出していることを指摘した。

第五節では、「暮春花下奉謝諸客勧酒見賀仲平及第（暮春、花の下、諸客酒を勧め仲平の及第を賀せられしに謝し奉る）」（173）という詩を取り上げた。その承句を再解釈し、また中国の典故を新たに指摘し、詩全体に溢れている機知を明らかにした。

これらの考察を端緒として、今後はさらに忠臣のほかの詩に見られる諧謔的表現を掘り下げていきたい。そして、忠臣の詩の諧謔的表現の研究をもとにして、今後は平安朝のほかの漢詩人の諧謔的表現をも検討していくことにしたい。

廖栄発（りょうえいはつ、LIAO RONGFA）
中国厦門大学外文学院

［付記］本研究は、中国の「中央高校基本科研業務費専項資金資助」を受けました（Supported by the Fundamental Research Funds for the Central Universities）（No.20720201010）。また、本稿は中国教育部人文社会科学研究青年基金項目（No.20YJC752016）による研究成果の一部である。

参考文献

王暁平「『田氏家集』的写本学研究」、『日語学習与研究』2016 年第 4 期
岡村繁等校注『白氏文集』、明治書院、1988-2018 年

加藤周一『日本文学史序説 上』第二章「最初の転換期」、ちくま学芸文庫、1999 年
川口久雄『三訂　平安朝日本漢文学史の研究　上』第七章第五節「島田忠臣と田氏家集」、明治書院、1975 年
川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』、岩波書店、1966 年
北山円正「白居易と平安時代の茶の詩」、『白居易研究年報』（18）、2017 年 12 月
興膳宏『古代漢詩選』第七章「島田忠臣――叙情の深化」、研文出版、2005 年
小島憲之『王朝漢詩選』281-304 頁、岩波文庫、1987 年
小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』、岩波書店、1989 年
小島憲之監修『田氏家集注』、和泉書院、1991-1994 年
小島憲之校注『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』、岩波書店、1964 年
後藤昭雄「平安朝詩文の「俗語」」、同氏著『平安朝漢詩文の文体と語彙』（勉誠出版、2017 年）所収
佐久節『白楽天詩集』、国民文庫刊行会、1928-1930 年
下定雅弘・松原朗『杜甫全詩訳注（三）』125-126 頁、講談社学術文庫、2016 年
謝思煒『白居易詩集校注』、中華書局、2006 年
朱金城『白居易集箋校』、上海古籍出版社、1988 年
中村璋八・島田伸一郎『田氏家集全釋』、汲古書院、1993 年
波戸岡旭「『菅家文草』中の滑稽的表現について」、『東アジア比較文化研究』（16）、2017 年 6 月
本間洋一『王朝漢詩叢攷』第 9 章「王朝漢詩の飲酒詠管見 ――語彙・故事をめぐる覚書として――」第 10 章「白居易の飲酒詩と平安朝漢詩」、和泉書院、2019 年
山本登朗「賄賂と和歌と漢詩 ――島田忠臣の一首――」、岩波新日本古典文学大系『月報』51、1994 年 2 月
廖栄発「島田忠臣の不遇と「大隠」」、『国語国文』第 86 巻第 11 号、京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店、2017 年 11 月
林中明「杜甫諧戯詩在文学上的地位 ――兼議古今詩家的幽黙感」、『杜甫与唐宋詩学 杜甫誕生千二百九十年国際学術研究会論文集』、里仁書局、2003 年 6 月
林中明・緑川英樹訳「白楽天のユーモア」、『白居易研究年報』（5）、2004 年 8 月
『漢語大詞典』、上海辞書出版社、1986-1994 年
『漢書』、中華書局、2005 年
『史記』、中華書局、2011 年
『全唐詩』、中華書局、1960 年
『全訳漢辞海（第四版）』、三省堂、2016 年
『日本国語大辞典（第二版）』、小学館、2000-2002 年